中鳥則立斃、其所用之筒長短、應吹之人氣息強弱、

〔愼夏漫筆一〕兒童之戯、有吹箭獲小鳥、唐山亦有同者、方干詩云、吹箭落翠羽、垂絲牽錦鱗、是也、

〔翁草九〕加藤出羽守吹矢筒之事

讃州丸龜城は、寛永十八年、山崎甲斐守家治拜領にて居之、相續ひて二代目を志摩守と號、志州卒後、采邑五萬石之內、舍弟勘解由江五千石配分、四萬五千石を嫡子虎之助領之、丸龜在城の處に、虎之助無程早世、無嗣して仍其跡斷絶す、就右與州大洲城主加藤出羽守泰興に、城請取在番共に仰付らる、因茲羽州は人數を卒し丸龜に被差向、其行列巍々堂々たり、然るに羽州自分の馬脇に、吹矢筒に吹矢を添て持せられたり、係る嚴重の行列の中に、異樣にぞ見へし、此羽州は隨分武の心懸賢く鑓の達人成し去れば右の吹矢筒には、何卒子細有べし、其家來に是を尋れども、所以を知たる人無し、異風成事故、爰に記し畢、

〔文昭院殿御實紀附錄上〕前朝綱吉〇德川生禁の嚴なりしをもて、〇略中吹矢といふものにて雀を打し事あらはれ、采地收公せらるゝたぐひ少からざりき、

〔江戸繁昌記二篇〕神明

小厮抽矢盛筒持筒審固、覷得親切、一氣吹送、識的有響、鯨鐘墜鬼怪雲走雷、金時面前、魅童送茶、賴光頭上、蜘蛛撒絲、戯具百色、應響轉機、奇々怪々、現異呈變、甚有古色、蓋前人所悅、此所以外今不復多觀焉、昔者武王克商、散軍郊射而貫革之射息、周末之亂、貫革復尙、孔子嘆之曰、射不主皮、於戯方今太平之久、士人肄貫革、餘暇得遊這戯射場內、豈不昌平之澤乎、

〔嬉遊笑覽四雜伎〕つなをつけて人形などを出す吹矢は、からくり的と云ふ、松の落葉、四條河原凉八景といふ加賀節に、からくり的、おやまか鬼に、うちかへり、鬼か佛になむあみだぶつ云々、其砧、せつかく握る飯にくもる日春旭吹矢的つまる所か息まかせ橘佐娘容義に、心底はからくり的、段